

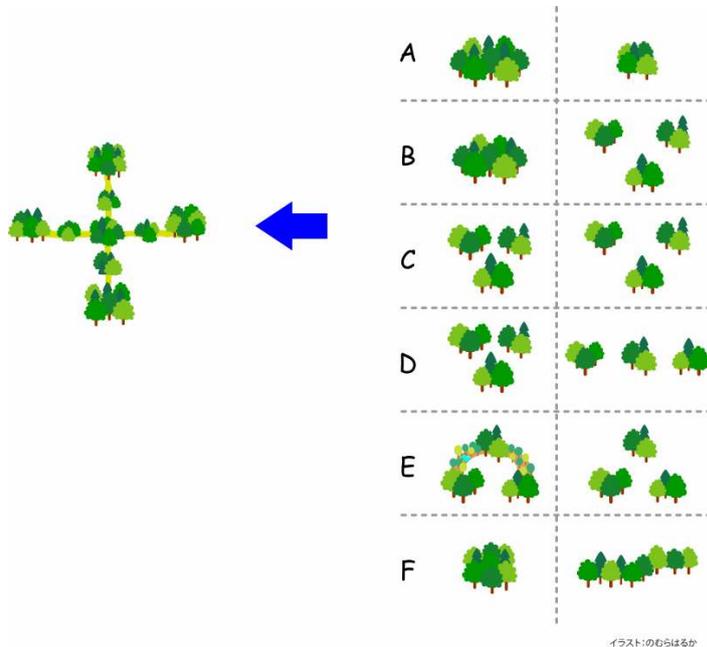
府中のビオトープを見つめて

第6回 ビオトープの形と配置

人にとっての自然の見方はまさに自然の概念化である。もちろん、自然は「ありのままに在る」のだから、そのように単純に割り切れるものではない。しかし、概念化して言葉に切り取らなければわかりにくいということも事実である。

生き物の生活空間＝ビオトープを平面的に見ると、塊と帯と点という3つのパターンにほぼ集約できる。つまり、森や草地、池などは塊状のビオトープである。林縁や水辺などの異なる2つの空間の境界をかたちづくるものは帯状となる。これと由来は異なるが川や沢などの水みちも帯状である。それでは点状のビオトープは何かといえば、草地にある孤立木、森の中にできた小空間（ギャップ）である。もっとも、帯と点のビオトープは塊のビオトープから派生する空間だから、機能としては重要だが、初めからある必要はない。いずれにしても、自然の形はだいたいこの3つに納まっている。少なくとも私たちにはそう見える。こうしたパターンが決まれば、あとは規模の大小と連続性の要件を加えることで、理想とする生き物の生活空間＝ビオトープの説明ができる。

ダイヤモンドら（1975）が実証的研究により提案した「生物生息空間の形態と配置」は概念として非常にわかりやすい。ビオトープの教科書によく登場するから、知っている人も多いと思う。僭越ながら、このオリジナルの絵に手を加えて森をイメージして描きかえてみた。ちなみにA～Fの絵は左・右で優・劣となる。



- A: 森は広いほうがよい。
- B: 小さな林に分かれているより一つの大きな森のほうがよい。
- C: 森をいくつかの林に分けるなら近くに寄せたほうがよい。
- D: 林が線状に並ぶより、等間隔に接してあるほうがよい。
- E: 林と林が離れているなら、緑の回廊でつなぐほうがよい。
- F: 森は帯状より塊状であるほうがよい。

くどいようだが現実の自然はこうも単純ではない。生き物の種類ごとに自然の見方は異なるからである。その言葉を返せば、人には自然がこのようにしか見えないということでもある。その人が自然を管理しているかぎり、こうした概念が私たちの叡智と生物多様性の妥協点と割り切れば、それほど悪い話でもないだろう。

=====

執筆者紹介：新里達也

1 級ビオトープ計画管理士。農学博士。専門は保全生態学および昆虫分類学。著書に野生生物保全技術（共編）や日本産カミキリムシ（共編）などがある。（株）環境指標生物代表取締役。東京都国分寺市在住。